追手門学院大学

# 地域文化創造機構ニューズレター

Institute for Regional Culture Development Newsletter　Vol. 18　2016. 3. 24

## 活動報告

### トピックス 1　シンポ「孤立・無縁社会を生き抜く」に147人

地域文化創造機構教授 副機構長
豊島 眞介

追手門学院大学地域支援心理研究センター分室附属心の相談室分室開設記念シンポジウム「孤立・無縁社会を生き抜く」（地域支援心理研究センター主催、地域文化創造機構協力）が12日夜、茨木市のローズWAMで開かれ、市民ら147人が参加して熱心に耳を傾けました。

釈徹宗・相愛大学人文学部教授

まず相愛大学人文学部教授で浄土真宗本願寺派如来寺住職の釈徹宗さんが基調講演。「成長期を終えて成熟期を迎えた今、価値観が大きく変化しています。特に30歳より下の世代は『さとり世代』と呼ばれ、成熟期への無意識的な対応が始まっているように見えます。ところが社会はまだまだ成長期のモデルで動いています。このあたりの不具合について考えねばならない。これからのテーマはフェアとシェアでしょう。また、この世代は、なによりも自分の気持ちを大事にするので、自己イメージと他者評価とのズレに苦しむことが多いようです」と、若年世代の苦悩について語りました。さらに高齢者世代の苦悩について「もともと無縁というのは、仏教用語です。理想の慈悲を表します。でも、今は孤立する社会状態を指します。無縁社会では、あちこちのコミュニティに関わる姿勢が必要となります。できるだけ、フェアなあり方で、シェアすることに取り組む、そんなコミュニティに関わる。もし、そういったものが身近になければ、自分で作る。これが成熟期の無縁社会を生きる態度でしょう。友人に大阪・ミナミの住職がいるのですが、お寺の境内の細長い敷地に生前個人墓を作りました。独居の高齢者がこのお墓に関わることで、新しいコミュニティができています。お墓だって取り組み方によってはよい共同体が生まれます」と話しました。

次いで浦光博・追手門学院大学心理学部長が「現代社会の孤立と孤独」と題して発表。「孤立していなくても孤独な若者が多い。孤独だと生きる意味を失います。非常に深刻な病理で、免疫力が低下しますし、心臓にも来ます。実は孤独な高齢者は少ないので、元気な高齢者が若者をサポートする、そして若者が逆に高齢者を支えていく、そのような社会は素晴らしいと思います」と締めくくりました。

溝部宏二・追手門学院大学地域支援心理研究センター長は「アナタの知らないうら（こころ）の世界―なぜ人は『絆』を求めるのか」と題して発表。「私たちは裏と表の二つの世界を生きています。本音と建て前、情と知、絆と自立と対比することができます。自らのうらにあるものは醜いから見にくい。その裏と表をバランス良く統合させるにはどうすればいいか。自分はロクデナシであると自覚することで、良い加減に諦めることが大切です。そうすることで、他者に期待し過ぎず、孤立感を軽減することが可能である」と話しました。

パネルディスカッションの様子

最後に社会福祉士で大阪府認定子ども家庭サポーターの辻由起子さんが18歳で結婚して、親から勘当と言い渡され、夫が働かない中で一人子育てしたがうまくいかなかった体験をもとに「子育て世代は孤立しないことが大切です。月１回、ここローズＷＡＭで女子会を開いて、ママさんたちのネットワークを作っています。子育てをしていると不安なことがいっぱいあります。予防注射のスケジュール表でも一目では分かりにくい。そのような相談のメールが毎朝、どっさり届きます。私は『児童虐待防止』の呼びかけが大嫌いです。泣き声捜して、悪者捜しさせるような言い方です。人と人のつながりが社会問題を解決します。皆さんの優しさをどうぞ分けてください」と話して大きな拍手がわきました。

パネルディスカッションに熱心に耳を傾ける来場者

この後はパネルディスカッション。司会を務めた河合博司・追手門学院大学地域文化創造機構長とパネラーとの主なやりとりは以下の通りでした。

――なぜ若い人は孤独なのでしょうか。

**釈**：自分の気持ち第一主義なので、傷つきたくないからです。踏み込んでこそつながるのですが…。ずっと友達に合わせ続けるのに疲れたと言って、不登校になった子がいました。

――同世代の感覚で若者を見るとわかりません。今回のシンポのような試みを連続的に開催して皆さんと考えてみたい。

**釈**：喜んで参加します。先生と生徒、親子のような縦関係、友人の横関係以外に斜めの関係もあります。伯父さん、伯母さんとの関係です。これが崩れて大人のモデルが少なくなったのも孤立する原因でしようか。

――若者の孤独をどうすればいいのか。具体的なやり方は？

**溝部**：特効薬はありません。孤独な人は希望がない。小中高と偏差値で輪切りされ、上りも滑り落ちもしないようにしがみついている。それでは人間関係は広がりません。表の世界である「横のつながり」と裏の世界である「縦のつながり」、それに加えて釈先生が仰る、表と裏をつなぐ地域社会の様な「斜めのつながり」の強化が大切です。

――ギャルママの話を聞かせてください。

**辻**：５年区切りで世代感が変わっていたのですが、インターネットが普及してからは１年区切りに変わってきています。共通言語のある同士でつながるので、翻訳する人間が間に立ってつながっていくことが必要です。

――私たちはどう生きていけばいいのでしょう。

**釈**：内在の時間を延ばすことに目を向けるきだと思います。コンビニのレジで待たされることでイライラする。内在の時間が委縮しているからです。普段は待たなくていいから。時間が委縮する装置ばかりが増えている。

――こころのバリヤをはずすのにはどうすれば良いのでしょう。

**釈**：何の役にも立たないような時間や場所を大切にするのはどうでしょうか？お寺参りなどはお勧めなんですが。

――スワヒリ語に「ポレポレ」という言葉があります。ゆっくりという意味です。お三人を貫くのはこの言葉では。言い残したことをお一人ずつ。

**溝部**：あいまいさを生きることは人の成熟にとても重要です。不確実なものを受容する能力であるNegative Capabilityという姿勢を獲得することは、一見頼りなげに見えますが、しなやかにしたたかに生きる力を持てる様になると思います。

**浦**：ボランティアグループに二つのタイプがあります。男性主体だとどうしてもピラミッド型のつながりになる。女性主体だとフラットな横のつながりで、ゆるやかで楽しげです。

**辻**：自己責任を広げすぎたのが今の時代です。私がやっている女子会は６時間続きます。初めはみんな大泣きします。失敗しても助け合って支えあうのが未来社会の在り方ではないでしょうか。

**釈**：ある年代から急にお世話されるのが下手になっています。人に迷惑をかけたりかけられたりする機会が減ったからです。都市生活ってそうですものね。だから「お世話され上手を目指す」を提案しています。

## トピックス 2　大阪府との協定に基づく 追手門学院小学校での出前授業

教育支援課 係長
（地域連携担当）　石田　弘樹

2015年1月に大阪府と本学院とが「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律」に基づく協定を締結しました。それ以降、両者は協力して大阪府民を対象とした環境教育や環境保全活動を実施しています。

この協定に基づいた主な取組としては、木材の流通マネジメント人材の育成を目的とした「ウッドマーケティング講座」共催、大阪府など主催の「知ろう！学ぼう！大阪南港エコフェスタ2015」への「追大ミツバチプロジェクト」出展や、「豊かな環境づくり大阪府民会議」総会での、本学経営学部水野ゼミによる「エコボランティア」の活動事例発表などがあります。

今回は2月22日（月）に追手門学院小学校で実施した出前授業に関して報告します。

講師の問いかけに手を挙げる児童

この出前授業では、大阪府と大阪府地球温暖化防止活動推進センターとが連携し、追手門学院小学校の4年生を対象に地球温暖化やエネルギーに関する講義のほか、手回し発電機を使った発電体験など、実践を通じた環境学習を実施しました。

授業の中では講師から児童たちへ「北極や南極、赤道も含めた地球の平均気温は何度でしょうか」や「温暖化が進めば2100年に地球の気温は何度まで上昇するでしょうか」「海面の水の高さは最大で何センチ上昇するでしょうか」といった問いかけがあり、そのたびに児童たちは元気よく手を挙げて答えていました。中でも印象的だったのは講師が地球儀を持って「ツバルという国がどこか知っていますか」と問いかけたとき、何人もが自信をもって挙手、あたった児童がしっかりと正しい位置を指し示したことです。

「ツバル」の位置を指し示す児童

授業を受けた児童たちは「地球の危機がよくわかった」「節電の大切さがよくわかった」と感想を話してくれました。また追手門学院小学校の杉田圭一教頭からは「随所に工夫がみられ、子どもたちにとってわかりやすい授業でした」とのお言葉をいただきました。

現在は今年度に実施した取組の評価と、次年度に向けての方針や課題を大阪府と本学院とで協議しています。皆様からもぜひご意見をお寄せください。お待ちしています。

手回し発電機を使った発電体験

## 地域文化創造機構の3年間の歩みを振り返って

地域文化創造機構 機構長
地域創造学部 教授　河合 博司

平素は、追手門学院大学地域文化創造機構の運営と地域・社会連携活動につきまして、格別のご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、地域文化創造機構を学院から大学に移管いたしましたのが2013年4月、機構の地域連携センターとしての連携考房童子開設が同年5月、以来約3年間、茨木市諸団体や市民の方々はじめ、北摂地域、大阪府、国立民族学博物館、伊丹市や岡山県真庭市、岩手県普代村などとも交流を深め、学生たちや機構構成員・学院教職員とともに多くのことを学ばせていただきました。これも偏に皆さま方のご支援とご厚情の賜物と深く感謝申し上げます。

これまで連携考房童子は、お気軽にお立ち寄りいただける拠点としてご愛顧いただいておりましたが、大学の組織再編に伴い3月末をもって閉鎖することとなりました。また、地域文化創造機構はその機能の多くを北摂総合研究所に組織替えし、地域創造学部が中心的に担う機能などにも再編し、新たに設ける研究・社会連携部とともに地域・社会連携を一層進めていく所存でございます。

成熟社会への移行期にあるといわれる昨今、大学・高等教育機関の役割も時代と切り結びながら、伝統的な建学の理念に裏打ちされた教育・研究の今日的充実―本学は本年の建学50周年に向けて、“自分史上、想像以上！”をキャッチフレーズに入試改革をはじめとする教学改革―を精力的に行い、一定の評価をいただいてきております。

併せて、地域・社会連携―「社会貢献」を第3の目的に加え、本学らしい教育・研究を活かした地域・社会活動からの学びと参画・交流を重視してまいりました。

地域文化創造機構と連携考房童子は本気で地域・社会連携を充実したいと考えていること、そのためには、何よりもまず、地域の方々との信頼関係を築くことを第一に考え、一つ一つの事業を誠意を込めて協働で実施していくこと、教職員や学生の提案や活動が地域の皆様に少しでも評価いただけ学生が新たな自分を発見すること、そして、結果として本学の知的資源が活かされその幅を広げ質が深まることを目指してきました。

茨木市と協働で実施した“子どもまちづり塾”、見山の郷の皆様や商工会議所の全面協力や茨木市からの資金援助も受けた新商品開発と販売、文化振興財団と協働で市民や子どもたちの協力も得て実現し、多くの市民の方々に喜んでいただいた新作狂言“茨木童子”や“追手門寄席”の公演、“ボッチャ”を通した地域の方々との交流や市の協力も得ての自治会連合会へのヒアリング調査の継続、更には機構独自で企画・運営した夏と冬の“ジュニア・キャンパス”、直近では、心理学部の心の相談室分室開設を記念した“孤立・無縁社会を生き抜く”の講演・シンポジウムは、学外の専門家や市民の方のご助力もあり、好評を博しました。などなど例を挙げればキリがありませんが、不十分さと力量のなさを痛感しつつ、今後の発展を期したいと思っています。

なお、私事でございますが、この組織再編に伴い、機構長の任も終了することとなりました。

3年間のご支援・ご厚情に心から感謝申し上げますとともに、今後とも格別のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

地域文化創造機構 ニューズレター

発行／追手門学院大学 地域文化創造機構

お問い合わせ

追手門学院大学　地域文化創造機構　「連携考房　童子」
〒567-0816　大阪府茨木市永代町4-202（阪急茨木市駅前「Socio-2」2階）
TEL:072-621-6015　FAX:072-622-1360　E-mail:douji@otemon.ac.jp